

地(大八洲組合の素住台全域と大原の一部を含む)の市街化区域設定の協定がまとまり、素住台部落の移転と営農再建の方策を組合として計画推進しているが、容易ならざる難事業であると共に、生々しい現実をふまえて進行中であるので、今その経過を記録する段階でないと考えられるし、詳細を書くにしのびない心境でもあるので後世の史家の批判を仰ぐ事にし、ただここでは将来の再建が円滑に進められるように守谷町、水海道市当局始め、関係各機関・各団体の方々の御指導と御援助を念願するにとどめて置きたい。

未来への期待

以上とりとめのない、行き当たりばつたりの今日までのいきさつを書きながって来たが、系統的にまとまった締めくくりも出来ない事は私自身が一番よく知っている。まことに残念ながらいたし方ない。

そして現在の大八洲の組合も、組合員も完成されたものでもなく、満足すべき状態でもない。欠点だらけであり困った事だらけで、あえいでいる現状である事に間違いはない。

ただ一つ困った事だらけでも、みんなの力をあわせて切り抜けて行く。時にはけんかをしながらも一つの目標に向かってまともに行こうという意欲だけは、少くとも持ち合わせている事が最大の財産であると思っている。

それではこれからどうして行くのか?、どうなって行くのか?、未来への夢は?。

幾度かさじを投げかけるような苦しい道を通り抜けて、ここまでこぎつける事が出来たかげには、それなりにまた私共の心をつなぎとめる、引きつける何物かがあったのであろう。

決して豊かな暮らしでもなく、華華しい生活でもなかった。満洲での見果てぬ夢。人と人とのつながりで死線を越えた、金では買えない貴い体験。その中から自ら生まれ出た得がたいきずな。私共の間にはこのような筆や言葉では語りつくせぬ何物かが存在するように思えてならない。その表現出来ない土台の上に立って何事も進められて来た。団体の規律でもなく束縛でもない。

幾度か逆境に立つても、よそからその先が案じられながらも、知らず知らずのうちに何時とはなくその苦難を切り抜けて来ている。

そして将来に対しても何の不安もなく、何のちゅうちよもなく、わが行く道を進んで行ける力を蓄積して来て居る。

農民として農業を通して新しい時代を開拓して行く明るい希望を抱いている。これが私共のただ一つの財産であり、そしてこの姿をどのようにして進めて行くべきか?、進めて行きたいのか?。各それなりに夢を描いて居るにしても、これはここでは語るまい。言わぬが華であろう。

若い者には若い者の夢があり、次の世代には夢のような未知の世界があるはずである。

老人が昔を語り、未来を案じて遺言したとしても新しい時代の何の足しになるだろう。むしろ次の世代の飛躍のじゃまになり、足かせになるのが関の山である事を自覚している。

ただ私は新しい世代を信頼し、新しい活躍に大いに期待を寄せている。

その期待にそむかず、いま二世三世が何のこだわりもなく、すくすくと伸びつつある姿をうれしく見守っている。そして必ずや輝かしい未来像がそこから生まれて来る事を堅く信じている。

満洲以来培われた組織の上に、新しい時代に即した新しい組織農業が築かれて行く姿を夢見ている。

二、組合の成長過程